



1984-1990

## 歴代屈指のチームワーク



後列 小寺 児玉 北村 太田 野依 加賀 鳥居  
中列 譲尾 水菓子 茂木 小笠原 後藤田 寺村 中村  
前列 福本 永井 北脇 山本 田辺 五百旗頭 本屋敷

### 俺たちは強かった

驚くなかれ、上の写真は全員47期の部員である。中学入部時は30人以上いたと思うが、数人が退部し、引退時には21人になった。例年の部員数を考えると目を見はる程の人数である。引退までこの人数を留めた結束力が我々47期の力だったと思う。どの顔を見ても個性の固まりの様なメンバーだったが、キャプテンの太田を中心にチームはよくまとまっていた。(このキャプテンが最もきついキャラクターだった様に思う。) その代わりに、先輩達には、生意気な学年であった様だし、後

輩たちには、大ゲーム等の練習の面で悪いことをした様である。48期の人数が異様に少ないのはこのためかもしれない。

おそらく47期の誰に聞いても、「俺たちは強かった。」と言うに違いない。戦績だけを見れば、往年の先輩方には遠く及ばないだろうが、皆の心に残る試合も多くあった。たしか某先生の追悼大会で、和歌山へ遠征に行った時、大会にはかなりの強豪が顔をそろえており、我々はハイレベルなリーグに組み入れられた。同リーグには北陽や中京もいて、六甲は、山口(現ガンバ大阪)率いる北陽に、本屋敷の挙げた1点と、ディフェンス陣の堅守で1-0

で勝利した。続く全国大会常連の中京にも満足いく試合内容で勝った。「他校の先生方に全国を狙えるチームと評された」と佃先生がおっしゃっていたのを覚えている。また新人戦の神戸市トーナメントでは、準決勝で御影工を1-0で破り、決勝の中央球技場へ駒を進めた。憧れの中央での滝川二高戦には惜しくも破れ、更にトップの山本をケガで失った。その後の県大会では、新聞に“ダークホースは六甲”と評されていたが、ゲームメーカーの太田が負傷し、残念ながら2回戦で敗退した。思えば、選手権や総体でも満足いく成績を残せなかったが、大分レギュラーのケガに泣かされた学年だった



と思う。しかしながら、春秋のリーグ戦では1部リーグの中で上位にくい込んでいたし、実力的には胸を張れるチームだったと思う。

最後に、我々の学年の力は、上の学年に混ざって試合を経験していた者が数人いたことと、本当にサッカー好きで、練習のない日も皆でボールを蹴っていたチームワーク、そして、10人以上のサブメンバーのがんばりによるものだと思う。サブとレギュラーの実力差などほとんどなかったし、サブの努力がそのままレギュラーのプレッシャーになり、チーム全体を強くしたと思う。このことから考えても、我々47期のサッカーは、まさに21人全員サッカーだったと言えると思う。

〔後藤田 祥二〕